

自分たちの村つくる

川崎平右衛門は元文4（1743）年に南北武蔵野新田世話役に取り立てられ、寛保3（1743）年に支配勘定格に昇進、寛延2（1749）年7月に美濃本田陣屋に支配替えになるまでの約10年間、新田開発に取り組み、これを見事に成功させている。

逃げ出す農民が多発

8代将軍徳川吉宗による享保の改革は、年貢の増徴による幕府財政の改善を最大の狙いとした。その柱の一つとなる武蔵野新田開発は享保7（1722）年7月、江戸日本橋のたもとに新田開発の高札が掲げられて開始された。武蔵野の土地は関東ローム層と呼ばれる腐植に富んだ真っ黒な黒ボク土に覆われている。リン酸欠乏を起しやすくて、大量の肥料を注ぎ込んでやらなければ満足な生産は期待できない。白羽の矢を立てたのが川崎平右衛門であった。侍で

農的社会デザイン研究所代表 葛谷 栄一

はなく百姓の出身で名主の平右衛門は、経済効率より、村人が自分の村をつくるという実感を

持ち、一緒に働くことで、お互いの心が結ばれ、助け合っていく風土づくりを重視した。井戸掘りなどの公共事業も、江戸の商人に請け負わせるのではなく、村人が力を合わせて工事するようにし、工事費を節約して村財政の負担を軽減するとともに、工事の賃金は穀物により支給した。

さらには、未開墾地や耕作放棄地を減らすには逃げ出した農民を呼び戻すことが必要であり、立ち帰り料として3両を支給して、たくさんの農民の呼び戻しを実現。飢饉（ききん）に備えて稗（ひえ）蔵を作り、毎年の収穫の10分の1を備蓄。3年していったばいになった稗は、毎年入れ替わりに3年経過した稗を江戸で売却し、その売却代金は村の催しや病人の手当などに使うための共有資金とした。

また、この地では肥料投入が不可欠であることから、高値での金肥購入を避け、相場が下がる農閑期に半値で仕入れておいてこれを貸し渡し、収穫物を2割高で買い取って返済させた。このための肥料購入資金は幕府から1500両を無利子で借り入れ、これを年1割の利率で商人に貸し出し、その利息1500両を充当した。

小金井桜は国の名勝に指定されており、全国に知られる。玉川上水の両岸にあった松並木が老朽化してきたことから桜並木にするのを平右衛門が計画したもので、大和の吉野山と常陸桜川の苗種を選んで植えた。これも平右衛門の遺産の一つなのである。（次回は27日付）



川崎平右衛門没後250年記念にかけられた「平右衛門橋」からの名勝小金井桜

（東京都小金井市で）